

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370500328		
法人名	医療法人社団きのこ会		
事業所名	グループホームあんきな家		
所在地	岡山県笠岡市新賀美之越3220番地		
自己評価作成日	平成27年3月13日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=3370500328-008&PrefCd=33&VersionCd
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館
訪問調査日	平成27年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・介護保険法の理念に基づき、家庭的な環境の中で利用者が健康で明るく安心した生活を営み、その有する能力に応じた生活を送れるよう適切サービスを提供する。 ・要介護者、介護者という関係でなく、共に生活する「家族」とした関係を大切にしている。入居者、スタッフ一人一人が自分の意見を出せる環境にしていく。 ・庭の畑や花壇をスタッフと入居者の皆様と協力し、作る、育てる、食べるを皆で共有していきたい。 ・近隣グループホームと協力し、納涼祭の行事などを開催したり、災害時に備え、合同での防災訓練を行い、お互いに支えあっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>介護保険施行と同じ年に開設してから15年目を迎えている。利用者と職員が共に生活する「家族」という関係を大切にしている事は、玄関に入った瞬間から感じ取れた。そこに飾ってある季節の花々、キルトで作った人形、アンティークな家具等が家庭的な雰囲気を漂わせて来訪者を迎えてくれる。利用者も笑顔で温かく迎えてくれ、日頃から職員との関係が良好である事を感じさせた。立地条件から地域住民との関わりに限界がある一方、医療施設に隣接している事や関連事業所との連携により、健康面や生活面で将来にわたり、安心して過ごす事ができる施設となっている。若い同世代の職員と共に管理者は、今までの経験を元に、ひたむきさと柔軟性を持って運営に当たっている。管理者は、これからも運営推進会議の充実、家族との関係強化、利用者一人ひとりの思いの把握等に向け、関連事業所と一体になって取り組む意欲を示している。その事が結果的に地域での存在感を発揮する事業所になると思われる。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「より家庭的に」という理念を大切にスタッフ全員で意識し、地域サロンなどの参加につなげていく。	「より家庭的に」という理念を、管理者及び職員が常に意識をしながら利用者への支援を行っている。理念は、スタッフ会議等で繰り返し確認しながら、実践の振り返りを行っている。	「より家庭的に」という理念に対して、具体的な目標を立てることにより、職員もそれに向けて努力し、達成感も生まれると思う。職員がより意識するために理念や目標を掲示することも必要かと思う。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	民家との距離があるため同グループ内の施設との交流が主となるが、祭りに顔をださせてもらったり、地域のスーパーと連携して食材の提供をお願いしている。	近所には住居が無いので日常的な関わりは少ないが、地域の祭りや「棕の木サロン」に参加している。法人内で開催している納涼大会には地域住民の参加もあり可能な限り地域との交流を大切にしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	呼びかけはしているが、見学程度の段階で、地域包括支援センターとの協力して地域の窓口になっていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	近隣のグループホームと共同で開催し、それぞれのよいところを引き出したり、民生委員の方の意見を参考にさせていただいている。	法人内の4グループホームと合同で2ヶ月に1回開催している。民生委員、市職員の参加もあり、各グループホームの活動状況、入居者の状況等を報告している。外部からの参加者から、入院先やインシデント・事故状況の質問や運営の参考となる意見を頂いている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の参加や、地域包括支援センター主催の地域密着連絡会議に参加している。	市との直接的な連絡は、法人の事業所が行うこともあるが、内容によっては直接問い合わせでアドバイスを受けている。あんきな家として、運営推進会議や市内のグループホームが参加する研修会・勉強会で、地域包括支援センター職員等と意見交換や情報収集を行って連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は禁止している。スタッフ全員共通の理解で関わっていく。	身体拘束は、法人内の方針でもあり一切していない。安全の為に危険な行動を制止せざるを得ない場面もあるが、個々に合わせた言葉掛けやじっくり話を聴く等により対処している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「自分の家族」ということを頭にいつもおいて利用者と接する様、スタッフが共有している。入浴時当利用し、身体状況の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今月より、成年後見制度利用されている方が、入居されたので、スタッフ全員で理解を深めていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際、書面をもって説明している。契約内容変更のさいは、随時お伝えしていく。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会や、面会時を利用して意見をお願いしている状態である。週に一度のスタッフ会議を通じて職員全員に浸透させていく。	家族によって、面会の回数に差があり、運営に関する意見も少ない状況である。利用料の支払いは直接支払う方法であるが、ホームに寄らずに帰る家族もある。家族からの電話は、電話連絡帳に要点を記載して職員間で情報共有をしている。	家族に対し、広報誌の発行や運営推進会議への参加の呼びかけ等今後の取り組みに期待をしたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ間ではケアだけでなく、日常生活でも自由な意見が出せるよう関係づくりを心がけている。	管理者を含め、比較的同世代の職員が多いこともあり、気軽に意見を言える雰囲気がある。慣れ合いにならない様に気を付けながら週1回のスタッフ会議で意見交換をして、参加が出来なかった職員へは、連絡ノートで情報共有をして意見を聞くなどをして運営に活かしている	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者とは、電話でいつでも連絡がとれる状況があり、時には助言をいただいたり、話しやすい関係性を作ってくださっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修の機会もあり、市内の病院での講演の参加や、栄養士の講演の参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループ内でのグループホームの連絡会議を2か月に1回持つようにし、問題を持ち寄り、知恵を出し合い、質の向上を目指している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の現状を把握し、また、今までの生活してきたことを大切にし、本人の安心できる環境作りにつなげていく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時、家族の要望を聞き、面会時なども随時伺っていくようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを実施していくなかで、今後の支援等を予測し、必要な支援をスタッフ間で話し合い、見極めしていく。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護者と要介護者の関係でなく、共に生活する「家族」のような関係であるという考え方で過ごしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族をつなげるために、家族会などの行事をとおしてふれあっていただく。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や知人はもちろん、以前働いていたスタッフや、その子どもさんなどもきてもらいふれうことで、いい刺激になっていると思われる。	時々、利用者の知人の訪問があり、居心地の良い時間を過ごしてもらっている。その時、知人が撮った写真を送ってくれたこともあり、馴染みの人との関係を大事にしている。法人内の他施設の利用者と馴染みの関係になっている人や家族の付添いで馴染みの美容院に出掛ける人もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者個人個人の状態を把握し、スタッフ間で話し合い、孤立することを防ぎ、居心地のよい環境に皆がなれるよう考えていく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設へ行かれた方も、法人内での移動もあるので、会いにいけるよう心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いや希望を把握するよう心がけている。コミュニケーションのとりにくい方でも、普段の関わりから読み取るようにしている。	利用者の多くが会話ができることもあり、会話の中から本人の思いを聴くことができる。さらに、利用者の生活歴や職業歴を把握して本人の気持ちに寄り添っている。	利用者との会話から、言葉の奥に隠れている思いの把握に努めることで、より良い支援に繋げたい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの聞き取りだけでなく、本人の昔話から聞いたことや、これまでのサービス機関の情報等も大切に、スタッフ間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活記録を残し、スタッフ間で話し、確認しあっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の生活歴や、趣味等を把握し、本人、家族の要望、ドクターの意見を取り入れ、現状に即したものにしている。	週に1度スタッフ会議を開催し、個々の利用者の情報を共有している。家族の要望や受診時の結果、日常記録等を参考に月に1度全体ミーティングを行い介護計画の見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録を残し、スタッフで情報の共有に役立てている。週に1回話し合いの機会を持ち、ケアの改善に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	「個人」を大切に、その人に必要なサービス、また今後予期される状況を推測し、その人に合ったサービスをスタッフ全員で見つけ出し提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	周辺施設や、敷地が大きな資源となっているので、個人の趣味とADLを考慮にいれ、豊かな暮らしが出来る様考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所内の病院に月1度受診し、先生の意見をいただいている。また、急変などでも当直医に連絡できる。専門外の治療は、専門医に受診お願いしている。	年に1回は、健康診断を実施している。また、毎月法人内の病院からの往診により健康把握を行っている。歯科医も往診をしてくれる。緊急時の往診や症状によっては法人外の専門医に紹介するなど、医療面でも安心ができる体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	グループホームに看護師はいないので、小さな気づきも、事業所内の看護師と情報を密にするよう心がけている。また、健康診断等もおこなっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者の方に、退院後のケアの状況報告したり、病院から、内服薬と食事の摂取方法など助言いただき、ケアに活かしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	個人の重度化をスタッフ会議で話し合い、末期のあり方を家族と相談し、あんな家で無理なことは正直に話し、代替となる施設を検討してもらう。	看取りは行っていないが、終末期の利用者については、法人内の病院等での対応を行っている。重度化した場合、設備的な問題で入浴援助が出来ないこともあり、ホームで出来ることの限界等を家族へ説明し、その後の対応について相談をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変を想定したマニュアル作成し、初期対応のイメージを作っておく。事業所内の病院の当直医、看護師に、協力要請する。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を中心に、避難訓練を年2回行い、地域の消防署と連携を取れる体制を整えている。また、事業所内の協力も得られる体制にある。	昨年、法人内の4グループホーム合同の避難訓練を実施している。距離的に地域との協力関係の構築が困難な点もあるが、法人内の協力関係を強めると共に、消防署との連携を密にして災害対策を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「個人」を尊重し、本人の意見や、主張を大切にした上で、声かけ、行動を起こすようにしている。	1階、2階とも、ソファーに座りテレビを観ている利用者とテーブルに座っている利用者がいたが、個々の思いを大切に、利用者同士のトラブルが起きないようにとの配慮を感じた。トイレへの誘導も「部屋に行きましょう」と羞恥心を感じさせない声掛けをしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉だけでなく、表情や行動から読み取り、その本人の意思を尊重していく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個人のペースに合わせて過ごしていただいている。気分や体調に合わせて、自室やホールを自由に行き来して過ごしてもらう。1階・2階も自由に行き来してもらう。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	希望される方は家族の協力で美容院にってもらったり、近隣の老人保健施設の美容院利用していただいている。服やスリッパなど本人に合うものを選ぶよう家族と協力している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	買い物の好きな人、調理準備をする人、盛り付けの上手な人、後片付けの得意な人とそれぞれに合ったことをやりながら楽しく過ごすようにしている。	担当者が栄養バランスや量を考えて献立を立て、材料調達から調理まで利用者に手伝ってもらいながら食事を作っている。調理をしている場所がリビングの一角にあり、入居者は、身近で音や匂い等生活感を感じながら食事を意識している。訪問時の昼食は、1階の利用者全員が完食であった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量は毎食記録し、スタッフ間で共有している。量も多少個人差をつけ、水分補給も2回を基準に必要なら随時補給してもらう。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自室の洗面台を利用して、口腔ケアの援助をしている。義歯の消毒は週2回ポリデントをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自室に個々のトイレがあるので、本人の行きたいときに使用することができる。必要な方は排泄記録を残し、状況に応じてトイレ誘導している。	各居室にトイレがあり、自立している人はリビングから自室に行き、気兼ねなく排泄をしている。自立していない人には、職員がさり気なく声を掛け、リビングに併設されているトイレに誘導をしている。排泄関係の情報は、全職員が共有している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日々の記録や、本人への聞き取りで排便チェックをしている。その方に応じた飲食の工夫、散歩等で便秘予防に努めている。必要な方は下剤にて対応する。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は午後の時間を利用し、本人のペースで入ってもらっている。午前の方が落ち着いて入られることが多い方は対応して午前中入浴してもらっている。	2～3日に1回のペースで入浴をしている。本人の希望を優先して、強制をしないで入浴を楽しんでもらっている。現在2人で介助が必要な人はいないが基本的に同性の職員が1対1で介助している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自室で休むだけでなく、リビングにもソファを設け、ゆったり出来るような環境作りを心がけている。夜の入眠時間もその方の生活習慣に合わせている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書をよく読み、その後の症状の変化に気をつけ、何かあれば医師に相談する。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事を中心にその方が得意なことに取り組んでもらっている。時間があれば歌会をひらいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日は周辺の散歩を支援している。また、買い物を利用しドライブしたり、家族の方と外出されるかたもいらっしゃる。	利用者は、職員と一緒に散歩を兼ねて朝のゴミ出しに出掛けるなど、ホーム周辺の散歩が日課となっている。2～3人でドライブを兼ねて買い物に出かけることもある。現在外食等の支援が出来ていないが今後は実施をしたいと考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人は現金は持たれていない。家族と協力し必要なものを購入していく。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望により支援する。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	1階と2階に共同の場所があり、それを包むように個室が配置され、ホールを使いやすく、皆で利用する。危険なものは目につかないように心がけている。	玄関には、季節感を感じさせる花やキルトで作った人形が飾られて温かさが感じられる。1階と2階のリビングには、ソファがあり、利用者は思い思いの場所で過ごしている。加湿器や空気清浄器も稼働していて、健康への配慮も感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	1階と2階に共同空間があることにより、片方過ごしにくければもう片方といった使い分けをしていただくことができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真、仏壇家具等をその人、家族の希望で配置、飾っている。中には飾りを嫌がり、片付ける方もいらっしゃるので本人の希望に合わせている。	1階と2階の部屋には、洗面所とトイレが設置され、室内の壁には本人の思いを大切に、家族の写真がいっぱい貼られている部屋、装飾が主な部屋、飾り物等があまりない部屋等々、個性的な部屋になっている。畳の横にベットを置いている部屋もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	必要な場所は手すりを設けたり、杖代わりに家具を配置して移動の安全を確保している。2階も階段とエレベーターを選んで使用できる。		